

臨海丘の手で進む「防災・福祉のまちづくり」

西戸部地区(西区)

臨海丘の手(都心部に近い高台の既成住宅地)にある西区西戸部地区では、細街路や階段が多く急坂も多い高齢者が住み続けるには課題が多い地区。この地区において高齢の女性たちが中心となり防災まちづくりと手づくりのケアの取組が息長く進められている。

1 まちの特徴

●「西戸部町」という町名が創設されたのは明治34年で、明治44年には一本松小学校が開校している。大正12年の関東大震災、第二次世界大戦を経て、基盤整備が行われなまま宅地化が進行し、現在に至っている。

●地区の東側には、野毛山公園や横浜市中央図

書館、横浜市青少年交流センター等の公共施設が立地している。

●交通機関は、最寄り駅は京急日ノ出町駅で、区域から直線距離にして約350mに位置する。また、横浜駅・桜木町駅からはバスが運行されており、地区中央に位置する一本松小学校まで1時間に2〜4本程度走っている。

●地区の内部は、道路幅員の狭い細街路が多い上に階段も多くあることから、緊急車両(消防車・救急車など)や福祉車両の進入が困難なばかりか、災害時の避難ルートも安全な状況とは言えない。また、細街路に沿って崖地になつている場所が多く、十分な幅員を確保するためには、沿道の住民等の負担が巨額になり個人では不可能な場合が多くみられる。また地区内の建物の多くは二戸建ての木造住宅である。老朽化しているものも見られ、震災時の倒壊や火災の拡大による被害が懸念される。



DATA 西戸部地区			
	人口概数	世帯概数	高齢化率
1985年	5,600人	2,100世帯	11.7%
2000年	4,300人	1,900世帯	20.0%
2010年	4,100人	1,900世帯	22.3%

2 崖の上の住宅地の暮らしやすさ

横浜の旧市街地エリアの特徴は、河口部や沿岸部の新田や沼地の上に形成された平坦な住宅地の他に横浜港や海岸線に沿って南北に走る下末吉台地の崖線上に市街地が広がっていることである。

こうした臨海部の丘の上に住むことの暮らしやすさは、閑静で風通しや日当たりが良く、眺望もよいこと。その上、坂を下ればすぐ繁華街や商業地であり、買い物や交通の便も良い。いわば都心居住と郊外居住のいいところ取りができるところである。

ところが、超高齢社会となると、臨海丘の手エリアは、必ずしも暮らしやすい地域ではなくなつていく。子どもたちが独立して、地区内に高齢者だけの世帯が増えていく。後期高齢者になれば、誰もが足腰が弱くなり、坂を下り、買い物に行くのにも難儀するようになる。繁華街に近接しているがゆえに、地区内にはもともと商業施設が無いケースも多く、都心の買い物難民になつてしまうリスクも高い。

ここでは、超高齢社会に向けて、このような課題を持つ臨海丘の手エリアの典型事例として、西区の羽沢西部自治会の活動を中心に、西区西戸部地区を取り上げてみよう。

3 急傾斜・細街路の 防災まちづくり

地域の安全・安心は「防災」「防犯」「福祉」が相互に連携しながら一体的に結びつく中で保障されるといえるのが、羽沢西部自治会の米岡美智枝会長の持論だ。現在、特に力を注いでいるのが「防災活動」。これは臨海丘の手地区にある

羽沢西部自治会特有の地形が原因となっている。羽沢西部自治会は野毛山と尾根続きの高低差26mのすり鉢を半分に切ったような北西に開いた傾斜地にある。同じ平面に2軒が並ぶことは少なく、隣同士でも1階と2階分ぐらいの高低差があることが多い。また地区の道の大半が、狭あい道路となっていて、私道が多い。そこにまた老朽木造住宅が、密集して、建ち並んでいる。さらに地区全体で車が入りできる道路は1箇所しかなく、車の通り抜けが出来ない袋小路の状態になっている。

米岡さんは言う。「地区内には、夜間は50台ぐらいの車が自宅の駐車場などに置かれている。仮に、震災が起こり、1軒でも火災が発生したら、地区内に瞬く間に燃え広がる可能性が高い。そこで誰か一人でも車で逃げようとしたら、地区外への唯一の避難路が塞がれてしまい、住民全体がパニック状態になってしまう。」

このような状況を改善するため、この地区で住民による防災まちづくりが本格的に始まったのは、本市の「いえ・みち まち改善事業」の

指定を受け、隣接する「西戸部二丁目第二自治会」と共に、「二本松まちづくり協議会」を平成18年に結成したことを契機にしている。ちなみに、「いえ・みち まち改善事業」は、本市独自の事業で、地域住民と行政が協働してまちの改善計画を作成し、地域の合意等が成ると公共事業メニューが適用されるものである。

「二本松まちづくり協議会」では、専門家を入れた勉強会から始まり、住民による街歩きやワークショップ、立体模型作りなどを通して、「羽沢西部・西戸部2丁目自治会」の住民がお互いに交流し、それぞれの地区の状況をつぶさに把握し、第三者に説明できるようにするところから始めた。そして平成20年に「二本松まちづくり協議会」として両地区の「防災まちづくり計画」を策定。計画に従って、地区内での雨水タンクの設置や井戸の復元、空き地を活用した三角広場の整備などを次々と実現していった。また平成24年には、地域ならではの防災マップを作成し、全戸に配布した。防災マップは、地域防災拠点の所在地や避難経路などの他に、消火箱・消火栓がある場所、雨水タンクや貯水タンクの位置情報、道の幅員から坂道の斜度、階段の段数・斜度、擁壁のある場所などが詳細に、三次元が平面に、しかもわかりやすく記されており、住民自身の日常生活感覚と長年の活動の成果が反映されたものとなっている。

米岡さんは言う。「二本松まちづくり協議会の活動で、お隣の西戸部自治会も含めて、いざという時にお互いに気持ち良く助け合うこと

ができる人間関係が形成された。これは、現実の災害に直面した際の、そして災害から地域が立ち直っていく際の何よりの財産だと思う」



4 細やかな 高齢者の見守り活動

防災活動で培われた人と人のつながりは、地域での福祉活動にも活かされている。羽沢西部自治会では、70代後半以降の高齢者が約4世帯に1世帯は存在している。高齢者福祉という

どうしても、一人暮らしの高齢者にスポットが当たりがちだが、仮に夫婦二人暮らしであったとしても、70歳代の後半を越えると、夫婦どちらか一方が介護の必要な状態になるケースが多く、特に夫が要介護状態になった場合は、妻が家で抱え込まざるを得なくなり、双方の身動きがとれなくなってしまう状態が多々あるという。

そこで、羽沢西部自治会では、地区の民生委員だけに高齢者の見守り支援を任せてしまうのではなく、自治会の役員、シニアクラブ（ことぶき会）友愛活動等で西区固有の組織「ふれあい会（羽沢西部みまもり会）」を作り、地区内を区割りして、それぞれ担当ゾーンを決め、ケアが必要な世帯に対して日常的に見守り・訪問活動を行っている。そして緊急事態が発生した時に民生委員に連絡する体制を取っている。

また町内会館で、自治会として月3回の食事を開催している。食事は自ら献立を考えたが、料理をつくるのが、しんどくなり、ありもののお惣菜で食事を済ませてしまいがちな後期高齢者に対して、栄養バランスの良い、手づくりの食事を提供すると共に、自宅にひきこもりがちな高齢者が外出して他の住民と会話を楽しむ機会にもなっている。食事会には常に15人近い高齢者が参加し、この食事会を楽しみながら通ってから1時間近くかけて、杖をつきながら通ってくる人もいるという。また食事会に欠席した人を、担当の自治会役員が気にかけて、フォローしたりすることで安否確認が出来、見守り活動の一環にもなっている。

このような羽沢西部自治会の高齢者の見守り活動の細やかさは、例えば地区に1軒しかないコンビニエンスストアと会長を始めとした自治会役員が連絡を取り合い、ケアが必要な高齢者が買い物などに来た際に、容態などに異変がないか、さりげなく共有化する仕組みが出来ていることから窺い知ることができる。

そして、こうした見守り活動の細やかさが、高齢者に対する悪質な訪問販売の阻止やオレオレ詐欺の防止にも結びついているともいえよう。

5 求められる 空き家問題への対応

現在、米岡さんが気になっている事は、地区内に空き家が増えてきていることである。これまで、住んでいた高齢者が病院に入院したり、施設に入所する。また亡くなられた後で、家屋が次の居住者を迎えないこととなく放置されてしまう。このような空き家問題は、何も西戸部地区だけではなく、郊外部も含めた人口減少・超高齢社会に臨む横浜市全域の課題である。ただこの地区の空き家問題の固有性は、市場経済の原理に任せるだけでは解決の難しい性格を持っていることだ。郊外部の敷地の広い、築年数がそれほど経過していない二戸建てであれば、仮に二時的に空き家となったとしても、それなりの賃料で借り手が見つかる可能性が高いし、また不動産屋に売却し、建て替え、新築物件としても売ることができる。

ところが、この地区の場合は、敷地が狭く、老朽化した木造家屋が多いため所有者が新たな借り手を探そうとしても難しい。また建築基準法が施行される以前に建築された家屋が多く、前面道路が狭いであつたりすれば建替えすることもままならない。その結果、空き家のまま放置される家が多いのだという。

このような空き家が増えて行くことは、防災や防犯といった観点からも大きな問題であり、将来に向けた地域社会そのものの存続に関わる事態だ。

米岡さんは「地区には公園のような広場が全くなく、自治会の御祭りや行事では羽沢稲荷の敷地を借りている状態。例えば行政に家屋を壊す費用を出してもらい、そこを空地にすれば、所有者と交渉して高齢者が買い物途中で休憩するベンチを置いたり、防災訓練や御祭りのための広場としても活用することができる。」と言う。行政として今後の空き家活用のあり方を考えていく上で、各地域の事情に応じた方策を考えるとといった点で参考とすべき意見ではないだろうか。

臨海丘の手エリアの象徴的な地区である羽沢西部自治会では、斜面にある密集市街地という街の地形に応じた住民による「手づくりのケア」が行われている。このような地域の暮らしやすさを維持・発展させていくためには、横浜ならではの地域の地形的な特性に応じた住民のまちづくりやコミュニティ形成を支援する柔軟かつ包括的な仕組みづくりが求められているのではないだろうか。